

優秀賞

【授業づくり】

思考力の育成 ～探求的な話し合いを通して～

東京都品川区立大井第一小学校

ふじ もり かつ ひこ
藤森 克彦


概要

本校の研究は、まず、自校の教育の実態を把握することからスタートした。具体的には本校の児童の実態やそれまでの校内研究の取り組み、本校の教師として身に付けたい力や願いなどを洗い出し、我々がどういうことを考え進めていくべきかを明らかにするため、教師一人一人にアンケート調査を行った。そこで見えてきたのは、我々が期待する児童の姿と教師としての課題意識であった。研究1年次を終えるにあたり、教師一人一人が「思考力の育成」をテーマに1年間の研究を振り返るレポートを作成し研究紀要にまとめた。思考力は「見えない学力」であるが、思考力があたかもそこにあるかのように見ようとしながら、授業改善に向き合っている様子が見えたことは研究の成果の一つとなった。

1 研究主題の設定と研究の方針

1 研究主題設定の理由

(1) 児童の側面から見えてきた授業づくりの方向性

本校は家庭に恵まれている児童が多く、低学年の頃から中学受験を目指したり、様々な体験的活動や文化的活動に触れたり刺激を受けたりしており、好奇心が旺盛で、基礎的・基本的な学力も高い傾向にある。国・都・区の各種学力調査の結果も全学年で平均以上であり、一部の

項目で課題は見られるものの概ね満足できる状況である。また、家庭や地域の教育力や意識は高く、学校に対しても協力的である。児童の潜在能力を開花させることは大いに可能かつ期待できる。

また、興味のある事象に対して、積極的にチャレンジしていく学習への関心は高く、意欲的に活動する姿が多く見られる。一方、児童の力で解決してみたいと思うことに対して解決していく潜在能力はあるものの、解決していくための自信や経験、課題を解決していくプロセスやスキルは十分ではない。特に高学年においては、問題解決の場面で期待したい主体的な活動が充実しているとは言い難い。また、課題解決にかかわる内容の是非ではなく、単に発言力の強い児童の意見に左右されることもしばしば見られる。さらに、知識・技能の習得を主とした教え込みの授業形態となると、学習への関心の薄れが態度として表れてくることもあり、その結果学級が落ち着かなくなるのが経営上の課題の一つとなっていた。

児童の心が揺さぶられ、今までの知識では容易に解き明かすことができない課題に思考をめぐらし、とことん追究しながら今までの知恵を基に協働して課題を解決していく、そして新たな考えを創り出していくことが、本校の児童にとっての本来の意義ある学習の在り方である。今回の学習指導要領では「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点で授業改善が求められてい

るが、まさに問題解決の活動を通して児童同士で意見や考えを出し合って解決したり、新しいことを創り上げたり工夫しながら協力して企画運営したりするための問題解決力やスキル、そして「思考力、判断力、表現力等」の「思考力」をさらに身に付けさせていくこと。このことこそが本校における最も優先順位の高い授業改善の目的であると考え。

そして、その目的を達成するための手段として、問題解決の学習を通して「課題を設定し、情報を収集し、整理・分析し、まとめ・表現する」のサイクルを繰り返す探究的な学習の中で、充実した話し合い活動をつくっていくことにした。

(2) 教師の側面から見えてきた課題

本校の教師はこうした課題、特に高学年の頃の落ち着かなくなる状況を数年前から感じていたが、それは中学受験をする児童が多く、どうしても避けられない課題であろうという認識をもちながら、生活指導や心の教育の側面を中心に対応策を講じてきた。しかし、その課題に全校あげて授業改善を策として十分取り組んできたとは言えなかった。そこで、我々教師がまだまだしなければならないことは何かを再度確認し、「授業で児童を変える」を原点に、改めてスタートラインに立つ気持ちで研究の方向性を考えた。

それは、一方的に知識・技能を教え込んだり一律に繰り返して練習させたりするなど、教師主導型の授業の脱却を図る必要性を感じていたこと。児童が教師から細かく指示されなくても、児童自らが主体的に課題を解決していく態度や力を身に付けさせること。そして、一部の教師だけでなく、どの教師にもできそうな指導方法を知り、授業力として身に付ける必然性を感じていることであった。当たり前のことだが、教師の指導力がアップすれば、児童の学力も必ず向上する。研究の直接的な目的は、まず我々教師が自ら変わることであった。

さらに重要なことは、本校の教師が「一枚岩」になることである。当然、思考力の育成や探究的な学習の実現や成果には一定程度の期間がか

かる。義務教育前期6年間を通して全ての学年と全ての学級、教科で、研究主題に沿った系統的な授業づくりをできるようにしなければならない。前年度の学年や学級で「そのことについてほとんど指導してこなかった」となると、次年度受けもった担任が指導してこなかった分のフォローをしなければならないということをししばしば耳にする。また、「みんなでやりましょう」と言いながら、結果的に研究推進委員会の一部の教師や授業改善に意欲的な教師に頼ってしまうこともある。研究の内容はベテランや若手に限らずどの教師でも具体的で分かりやすく、何をするのか、そして何はしないのかということを明確にしておかなければならない。一部の教師や学年・教科だけの改善でうまくいくほど簡単ではない。

(3) 教師に必要な省察

そして、我々の教育実践は、技術的合理性に基づく「How-to」的なものではなく、自分自身を省みながらその善しあしを考えて再度チャレンジしていく「省察の実践」を行っていく姿である。学校は授業研究を中心に、教師一人一人の自己内対話とともに同僚との対話により、自分の考えや情動が引き出される場としなければならない。特に同僚の実践は、自分自身のものの見方や日常の授業実践そのものを問い直すことにもつながる。そうしたことの繰り返しや経験によって、自らの指導力は着実に上がっていく。単に外部の研究発表会や教育会などに参加するだけでは、指導力向上の期待はできない。

研究1年次を終えるにあたり、教師一人一人が「思考力の育成」をテーマに1年間の研究を振り返るレポートを作成し、研究紀要にまとめた。思考力は「見えない学力」であるが、思考力があたかもそこにあるかのように見ようとしながら、授業改善に向き合っている様子を窺えたことは研究の成果の一つとなった。

ただし、研究校の指定を受けることはイコール教師の多忙感となり、児童とかかわる時間の確保や通常業務への負担増大などへの危惧もあった。自らの研鑽を高めることと、そのための時間

や労力とのバランスを考えた研究推進の在り方自体も模索していくこととした。

2 研究の方針

(1) 研究成果を上げるための基本的スタンス

こうした児童の実態や教師の思いなどをもとに、研究成果を上げるための基本的スタンスを次のように確認し、研究をスタートさせた。

- 問題解決学習を通して、児童が互いにかかわりながら思考力を高めていく授業をつくること。
- そのために、問題解決学習の中で探究的な話し合いの場をつくるための教師の指導力を身に付けること。
- ベテランも若手も、全員が研究主題に沿った授業づくりができるよう、研究していく内容を精査し分かりやすくイメージしやすいものにする。

一般論として、学校の教師集団には、総論は賛成しつつも各論は一教師任せという、旧態依然とした体質が残ってはいないだろうか。まさに「蟻の穴から堤も崩れる」の言葉どおり、「自分一人だけやらなくても誰かがやってくれるだろう」という意識が、目の前の教育課題を増長させてしまうことは容易に考えられる。研究において授業改善は当然のことだが、教師全員が同じ土俵に上がって、各自が何をしていくのかが分かる研究にしていくことが何よりも重要であり、そのことが確実に成果につながると考える。

(2) 研究をスタートする上で校内で確認したこと

本校の児童数は800名を超える区内小学校の中で一番大きな規模である。様々な教職員がいる中で重要なことは、各自の目的意識が同じ方向を向いた取り組みをすることである。そのため、研究内容とは別に、研究を推進するための基本的な考え方を下記のように示した。

- 日常の各教科等や学習場面で活用できるよう、汎用性のある研究成果を追求すること。
 - 全学年で授業研究（提案）をし、系統的な実践的研究になっていること。
- （それを6年間しっかり取り組み、卒業までつ

なげていくことをイメージする）

- 研究の成果として、研究をスタートさせる前よりも教師の指導力が上がり、児童にも変容が見られることを期待すること。
 - （Aという状況からBという状況になったという見方をする）
 - ベテラン教師や若手教師を問わず、どの教師にも研究していることが分かる平易でシンプルな研究内容とすること。抽象的で難しい「言葉遊び」を戒め、具体的なイメージをもって検討、議論、話し合う。
 - （「イメージできないものはマネージできない」ことをモットーにする）
 - 日々の授業実践の場で試行や積み重ねを重視し、授業力は年間数回の研究授業だけで身に付くものではないことを心得ること。
 - 研究の運営は効率性を重視し、授業協議会や授業記録、研究紀要作成などを工夫すること。
- なお、上記の趣旨について、教師一人一人の具現化と当事者意識を高めるため、各自が実践した内容と成果等をまとめ、本研究発表会資料（第2部）『実践報告』に掲載した。

2 | 思考力の育成

本校がなぜ研究主題に「思考力の育成」を選んだのか。それは、本校の児童の実態や教師の願いなどのほか、学習指導要領の改訂の趣旨、そして第四次産業革命とポストコロナ時代を生きる子どもたちに必ずや身に付けさせたい力であることである。思考力の育成は避けて通れない課題であり、そのための授業をどうつくるのかという研究課題は、学校にとっても教師にとっても至極当たり前のことである。

1 思考力の育成を育てる本校の考え

(1) 思考力の育成に対する思い

今回の学習指導要領では、「生きる力」をより具現化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力が、「知識及び技能」の習得、「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向か

う力、人間性等」の涵養の三つの柱に整理された。これらをそれぞれバランスよく育成していかなければならないが、今までの経験則からいうと、「思考力、判断力、表現力等」の育成に特化して重点的に指導するということが十分とは言えなかった。それは、我々教師が知識・技能の習得を目指せば、それに並行して思考力・判断力・表現力等が身に付いていくという思い込みが少なからずあったからなのではないだろうか。また「思考力、判断力、表現力等」を求めていく中で表現活動などを通して「表現力」を高めることは、普段の授業でも日常的に行ってきた。しかし、「思考力」を付けるとなると、この学習で「ではこうして、こうやって、こういうところを見取って」という教師側のノウハウがどのくらいあったのだろうか。「そこはあまり触れずにやってきた」という感じは否めず、「積極的に、これだ」という確かな方法で指導してきたとは言い難い。

また、思考力の育成を目指す授業づくりは、教師個人で研究実践していくことはなかなか難しい。そもそも、学習の過程で「聞く、話す、読む、書く」といった基本的なスキルや資質・能力を複数年かけて系統的に伸ばしておかなければ、思考力を身に付ける授業は不可能であろう。目の前の子どもたちにかかわってきた全ての教師が丸となって同じ方向を向いて試行錯誤し、教師同士がもっているノウハウを結集して互いに高め合っていくための研究体制が必要となる。

なお、一般的に「思考力、判断力、表現力等」とひとくくりで表現されているが、研究主題は「思考力」だけとした。これは、「思考力」は「判断力・表現力」とあいまっているもので、「判断力、表現力」が「思考力」に包含されているものとして考えることにした。

(2) 思考力を育てる方法を他実践に学ぶ

本研究をスタートさせた当初は、年完全実施となる学習指導要領の基本方針で示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進を目指し、児童同士の協働的な話し合い活動の工夫・改善を主眼において提案授業に取

り組んでいた。しかし、もっと「思考力の育成」に焦点化し、思考力が今までよりも高まる教科指導における具体的な指導方法はないだろうか、皆で指導方法を共有し日頃の授業に生かすことができれば、教師一人一人の指導力がさらに身に付き、組織体として成果が出せるのではないかと考えた。

さらに、教師には様々なタイプがいることも事実で、「これはいい」と思うとすぐやってみる教師もいれば、「よさそうだな」と思いながらも時間をかけて慎重に見極めようとする教師もいる。どの教師でも理解しやすく、できそうだという「術(すべ)」のような方法はないものかと模索した。

そこで、参考文献などで、関西大学初等部の思考スキル習得のための「シンキングツール」を活用した授業実践を参考にした。ここでは、課題解決の過程で集めた情報を「比較する」「分類する」「関係付ける」「構造化する」などの思考スキルの視点を明確にした実践で、どの教科にも共通に求められる「思考する」手法として成果を上げていた。また、新潟大学教育学部附属新潟小学校ではICT(デジタル)シンキングツールを活用した実践も行われており、本校でも一人に1台のタブレットが配布されて以降、ICTを活用した授業提案において大変参考にさせていただいた。さらに、川崎市立東菅小学校では、「比較」「関係付け」「既習」「話型」を「思考のすべ」として活用し、思考力を高める取り組みを実践している。特に、授業の終末の段階で、自己の変容や他者からの学びを基にした学習の「振り返り」の在り方については、本校の「児童の見取り部会」の提案に際し、大いに参考になった。

今回の研究では、問題解決学習を通してグループで探究的な話し合い活動の中で、シンキングツールを活用して集めた情報を「比較」「分類」「関係付け」「構造化」などの思考スキルを駆使して、授業のねらいを達成できる授業づくりを行うこととした。問題解決学習を通して、児童らが主体的にシンキングツールを選択・活用し「思考スキル」を身に付けさせる方法は、思考力を向上させる授

業づくりの手立てとして、全ての提案授業で試みることとした。

(3) 思考力のとらえ方と分かってきたこと

研究を進めていく中で、研究副主題に掲げた「探究的な話し合い」については、従来（過去に）行ってきた話し合いと何が違うのかということを議論した。今までは学習課題に対して子どもたちがすぐ「分かった」「それ、できるよ」となれば教師も満足だった。しかし裏を返せば、今まで学習塾やどこかで学んできたものをそのまま答えればよいということだったと言える。

しかし、学習課題に対して児童が「今まで分かっていたつもりだったのに、まるっきり分からなくなった」「理解していたはずだが、どんどん分からなくなった」ということが、本来期待する児童の姿なのではないかと思うようになってきた。つまり、学習を始める際に、学習課題に対して「えー、分からない」「どうしてなんだろう」という、何かを疑問に感じ不確実に思う状態こそが、どうか解を求めていこうとする創造的な思考や、それが本当に正しいことなのかを確かめて判断しようとする批判的な思考が活発になることだと考えた。

なお、この創造的な思考や批判的な思考と、学習過程の流れや教材、指導形態、などとの関連や影響、妥当性などを検証すべきところだが、あまりにも学術的であるため、今回の研究ではあくまでも学習評価の状況を通してのみ確かめることとした。

また、探究的な話し合いを試みていく中でもう一つ分かったことは、教科のねらいに即した創造的な思考や批判的な思考とは別に、子どもたちに身に付けてほしい大事な能力があり、それを伸ばしていくことが大切だということだった。それは、学習課題に対して物事を丁寧に調べたり、友達の意見を引き出そうと発言を促しその考えを認めてあげたり、出てきた意見を整理し選択肢にして友達に投げかけたりするなど、思考する際の側面的な働きをする児童がいることである。「話し合いのグループに、あの子がいてくれると話し合いが

深まるんだよ」という児童である。

小集団で協働して思考する際には、何か配慮したり世話したりすることも必要な能力として、もっと教師が意識して認め伸ばしていくことが必要ではないか。また、そうした支援的な力は創造的な思考や批判的な思考とも深く関係しているのではないかと考えた。そうした児童のもつ力は、もともと家庭での影響や様々な教育的価値のある体験や刺激を受けるなどして、長い時間をかけて育まれてきたと思われる。学級集団の中での活躍なども大いに関係していることは経験則としても想像できる。

思考力の育成、探究的な話し合いの活動は、長いタームでの日常の学級づくりの在り方にまでも大きく影響している、総合的な取り組みと言える。

2 GIGA スクール構想の開始に合わせた授業づくり

(1) 思考力をさらに育成するタブレット端末の活用

思考力を育てる実践は、従来紙ベースを基本とした活動を通して付箋紙を使うなど、地道に行われてきたところもあった。しかし、できるだけ子どもたちに任せる主体的・対話的な活動は、どうしてもある程度時間がかかることが大きなハードルとなっていた。こうした時間や準備の手間などは、今回のICT（タブレット活用）によって大幅に改善された。また、我々が予想していた以上に児童はタブレット端末やPC機器の扱いに慣れており、シンキングツールを活用した思考スキルによる授業実践が容易になったことは、まさにタブレット端末が児童の学習活動を後押ししているものであったと言える。

なお、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の答申（平成20年1月）でも、教育内容に関する主な改善事項の「理数教育の充実」の項で次のように述べているので、追記しておく。「今回の学習指導要領改訂においては、思考力・判断力・表現力等の育成の観点

から知識・技能の活用を重視し、各教科等における言語活動の充実を図ることとしている。(中略) 論理や思考といった知的活動の基盤という言語の役割に着目した場合、比較や分類、関連付けといった考えるための技法、帰納的な考え方や演繹的な考え方などを活用して説明する、(中略) といった言語活動が重要であり、これらの活動を行う算数・数学や理科の役割は大きい。」

(2) 思考力の育成を図る授業の日常化

令和3年2月、品川区GIGAスクール構想により、児童一人一人にタブレット端末が配布された。このタブレット端末の一番のよさは、クラウドを使っている児童同士の情報共有ができることである。本区のタブレット端末には学習支援アプリ「ロイノート・スクール」が導入されている。各自がつくった意見カードをPC画面上に集約でき、シンキングツール上で自由に移動させることで、アイデアの発散と収束を可視化しながら自分たちの考えを創り出すことが、今まで以上に容易にできるようになった。

本校では、このロイノート・スクールのソフトに入っている「シンキングツール」を日常的に活用している。その利点は、時間の短縮であり、時間が終わってしまっても次の時間に続きができるよう保存しておくことができることである。さらに、各自がアイデアを考えてくるというような個人作業は家庭で行い、クラウド上に提出させることでその分の話し合い等の時間がさらに確保できる。また、何よりも、今まで友達の前でなかなか自分の意見が言えなかった児童も、PC上に自分の意見を出すことができるようになったことである。

なお、本校が授業で多用しているシンキングツールは、主にベン図(比較)、ピラミッドチャート(構造化)、Y/X/Wチャート(分類)、クラゲチャート(理由付け)などである。基本的にはどのシンキングツールを使うかは教師が指示しているが、学習課題の内容によっては、どのシンキングツールを使うかは児童に選択させることも始めている。

ただし、何でもかんでもタブレット端末を使っ

ての問題解決がよいというわけではない。例えば、低学年では、あえてシンキングツールを紙ベースで準備し、付箋紙で各自の意見を出し合うほうが効果的な場合もある。

3 | さらなる研究推進のために

校内研究は個人研究ではない。全教職員が豊富な経験と知恵を出し合い、組織体として同じベクトルの方向で協働したものでなければならない。また、研究は日々の授業や様々な教育活動に生かし教育課程のさらなる質の向上を目指すべきものである。単に授業づくりの提案だけでなく、研究推進の運営やその後の日常的な授業における活用につなげるという広い視点も含め、「研究の術」になるものも試行してきた。

1 さらに指導力を高めるための運用

(1) 4部会の設置

一口に思考力を育成する授業といっても、これだけやればよいというほど簡単ではない。ただ、「これだけは最低限必要なこと」を明確にし、常にそのことを意識して授業づくりや授業評価を行うことが重要であり、特に若手教師に身に付けさせたい資質である。

本校では、授業づくりの際に検討していく上で必要なことを、①指導計画(P)、②実際の活動の支援や環境づくり(D)、③評価・振り返り(C)、の三つとし、それぞれについて検討していくことにした。その理由は、通常の授業がP-D-Cの流れで進められており、どれも必要不可欠な要素であるからである。そして、この三つは教師として「授業づくりの大事な視点」としていつまでも誰もが忘れずに思い浮かべることができると考えた。

さらに、全学年で授業提案をしていくときに不可欠なことは、6年間を通して系統的に児童に身に付けさせたい学習スキルの習得であり、④学級の雰囲気(学級づくり(G))である。学年ごとに必要な学習スキルをしっかりと積み上げていくことで、6学年における探究的な話し合いは、今より

も相当質の高い学習が期待できると考える。この①～④の四つの視点を、授業を検討していくための4部会とした。それぞれの部会は各学年の担任が1名ずつ入り、さらに専科教員も加えて構成した。学年部会の構成員を「横糸」とすると、4部会の構成員は「縦糸」となり、学年から出された授業提案は、ほかの学年の教員も4部会の中で各自が当事者意識をもって検討・分析できるようにした。

(2) 4分科会の特長

また、4部会ごとの提案授業の検討会はどの学年の担任も、ベテランも若手も、誰もが分かり実践できるかどうかの視点をもちながら進めてきた。授業づくりの検討を進めていく中で、学年部会から出された提案内容に対して、4部会が「分かりやすさ」の視点で内容を修正・見直すこともしばしばあった。検討の過程でいつも「分かりやすいか」「具体的にイメージしているか」という意識を絶やさない雰囲気が出てきた。

さらに、4部会にしたメリットは、教師の「授業づくりの力量」を強くするところにある。次ページの図は、授業をつくっていくときのストーリーを左から順に表したもののだが、左から2列目のところでこの四つの構成要素を並列にすることで、授業づくりを考える際の視点が明確になった。ま

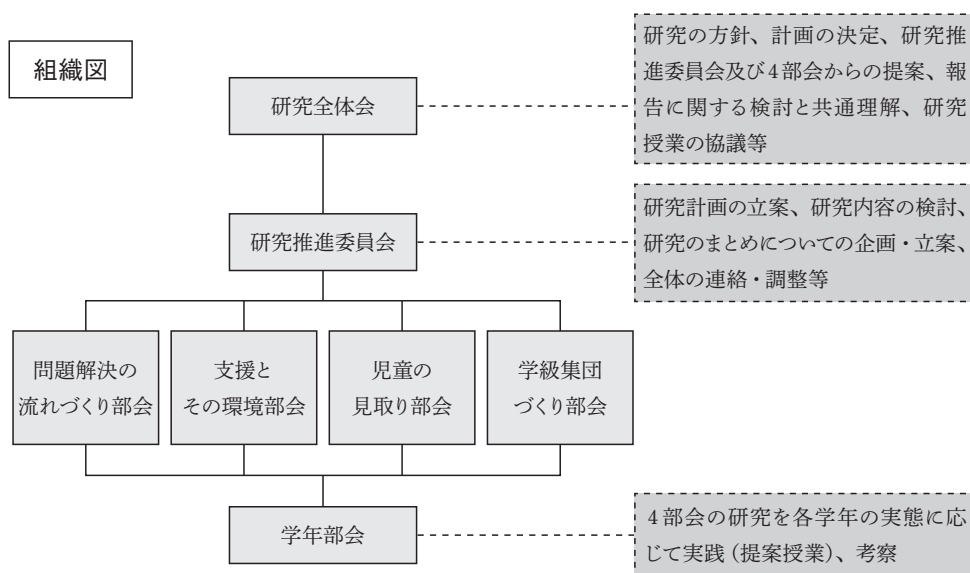
た、その選択肢があることで教科や単元が変わっても柔軟に授業づくりができることである。授業実践をする内容によっては、この四つの構成要素の重点の置き方を変えたり選択したりすることになる。

こうした授業づくりの共通した視点をはっきり示したことで、初任者研修、2年次研修、3年次研修など、キャリアに応じた授業提案（観察）の際にも、この四つの視点から授業を考え振り返ることが可能となり、思い付きや自分よがりの授業がなくなってきた。若手教師の週ごとの指導計画にも、「○時間の授業では、学習の振り返り（C）を重視して授業をする」などと、日常的にこの視点を活用して自己分析している姿が見られるようになってきた。

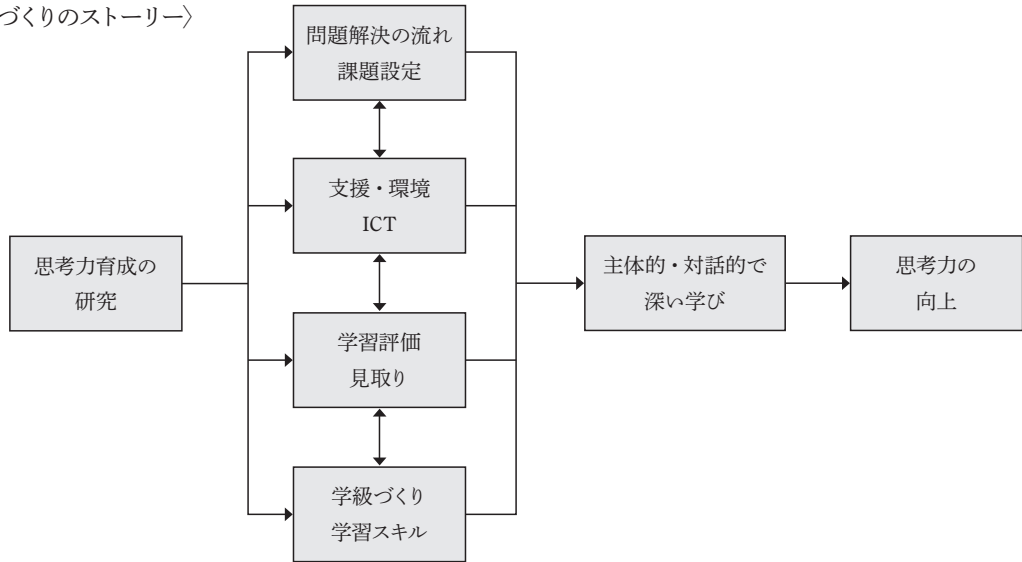
(3) 研究協議の可視化

研究授業後の研究協議会は、発言することによって当事者意識が高まり、自分の考えをブラッシュアップしたり新たな課題を得ることができたりする貴重な機会と考える。若手教師が盛んに協議に参加する姿は、学校の活力が感じられるうれしい場面である。

そうした教師の積極的で果敢に参加する研究協議会を目指し、4色の付箋紙を使った個々の意見の集約と、それを基に意見交換ができるよ



(授業づくりのストーリー)



う、4部会ごとに「拡大指導演」を活用した話し合いの場をつくってきた。例えば、「問題解決の流れづくり部会」では主に、教師の発問と課題提示、教材、対話の流し方の視点で検討するが、本進行役が分科会メンバーからの発言や付箋紙を基に、本時指導演の拡大した掲示物に直接よかった点や課題とすべき点など意見を書き込んでいった。さらに、それらの意見の要旨を簡潔に整理し、次の提案につながる汎用性のある結論を出していった。研究1年次では、拡大指導演にただ意見を書き込んだり付箋を貼って意見を述べ合ったりする程度だったが、2年次は簡潔に意見を集約し書き込んでいくノウハウも部会同士で共有し、内容を参考にしながら向上していった。

付箋紙や短冊などを使って意見を出し合う方法などは多くの学校で行われているが、それを指導演の上で議論することによって、指導の流れのどこがポイントとなるのかなど、45分間の指導のストーリーをイメージしながら検討するようになった。その結果、各教師が「自分だったらどうしていくか」という意識や指導力に生かせる大事なポイントなどを得ることができた。ベテラン教師が「授業の流れのここでこうすると、子どもた

ちの意見も出やすくなるよね」など、授業のコツのような話も自然と若手教師にしている場面が多く見られるようになった。

2 ICT活用の今

(1) ICT活用が校内で日常化するまでの取り組み

本校は、今年度から品川区のICT活用重点校の指定を受け、ICTの研究に取り組んでいる。さらに、本紀要の2-2「GIGAスクール構想の開始に合わせた授業づくり」で述べたようにタブレットを活用してシンキングツールを使用したことで、授業内でのタブレット活用は全クラスで急速に進み、既に本校でのタブレット活用は日常化していると言える。タブレットが配布された昨年度の2月から10月までの間にタブレット活用が日常化することができた要因として「ICT活用重点校であること」「シンキングツールのタブレットでの使用」のほかに、以下の2点にあると考えている。

1点目は、当初から、全教員でやることとやらないことを決めたことである。従来のICT教育は、いわゆる「ICTに得意な教員」が取り組んでいて、ほかの教員はあまりかかわっていないということはなかっただろうか。積極的に取り組む教員と手をこまねいている教員がいたら推進はできない。

本校では導入が決まったと同時に、「児童用のタブレット活用ルール」の作成とともに「教員用の活用指導ガイドライン」を独自に策定して、どの学級も学年も足並みを揃えて活用する体制をつくった。例えば、クラウド上での児童と教員のやり取りは夕方5時までとする、不登校の児童にオンラインで対応する場合は生活指導部に報告・確認する、学校および自宅以外にタブレットを持ち出さないなどである。次年度、他校から異動(転入)してきた教員も、何をすべきか明確になっていることで、継続性をもってスムーズに活用できると考える。

2点目は、ICTに関する教員の自主研修会の開催である。自主研修会は、昨年度の2月から7月までの間に合計で11回開催された。名前のとおり、ICTについて学習したい教員が自主的に参加する研修会であるが、毎回ほぼ全ての教員が参加していた。研修会は、タブレットが配布された当初は、タブレットやロイロノートの操作方法、ICTを活用して自身が行った授業紹介の内容で行われ、4月からは、タブレットを活用して「主体的・対話的で深い学び」を促進する授業づくり、Teams・Class Notebookの操作方法やそれらを活用した授業の紹介と、より高度な内容で行われるようになった。また、それらの研修会は、ICTを研究する専門家にアドバイスをいただき、最新のICT教育の研究を基にして進められた。

(2) ICT活用重点校としてのこれから

東京都教育委員会から示されている「一人1台端末時代における教育のデジタル化ロードマップ」によると、本校は第2期に位置する。そして、第3期に向けては「タブレットに蓄積された学習記録を活用した指導」に取り組む必要があると考えられる。授業でのタブレット活用が日常化した本校では、日々の授業の学習記録がタブレットに蓄積されている。それらの学習記録は児童、教員がいつでも見返すことができる利点をもつとともに、蓄積方法を工夫することで、例えば、児童が過去の学習記録から今取り組んでいる課題のヒントに気付くことができたり、児童がこれま

での学習記録を見返すことで自身の成長に気付いたりすることができると思う。

ネットや書籍ではICTを活用した様々な授業実践を見ることができる。それらの素晴らしい実践はICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」を促進すると考える。しかし、ロードマップの第3期にあたる「学習記録の蓄積・活用」の研究実践例は少なく、具体的な方法が明らかになっていない。本校では、「学習記録の蓄積・活用」をこれからの重点校としての研究テーマのキーワードに位置付け、児童の成長を促進するとともに、その研究成果を発信することを目指す。

4 | 研究の成果と課題

今年度、7回の研究授業を行った。授業後の協議会では4部会のそれぞれの部会での意見や講師の先生からのご指導、当該学年の実施後の振り返り、全教員の実践レポートなどをもとに、成果と課題を整理した。研究テーマにかかわる我々教員の意識や指導力の変容、研究推進の取り組みに視点を置いて整理した。

●教員の変容が伝わる主な声

「研究する前よりも……」

- ・学級の学習スキルの定着状況や何が足りないかという課題が見えてきた。また、どの学年までに、どの程度話合いの仕方をはじめとする学習スキルを身に付けさせなければならないのか、その意識をもって授業するようになった。
- ・児童は自由に自分の考えを表出でき、友達を受け入れてくれる学級の環境や雰囲気や常につくっていることが不可欠だと分かった。
- ・我々が思っていた以上に、児童に考え判断する力があることが分かった。今までできていなかったのは、自分自身が子どものもっている力の引き出し方が分かっていなかったのではないかということであった。
- ・問題解決学習の流れのポイントは、「学習課題の設定」「話合い活動」「振り返り」の三つの場面であることが分かった。また日々の授業でもこの視点を意識するようになった。

- ・タブレット端末の活用を含め、話し合い活動の方法や発表のさせ方、シームレスな家庭学習との連携等、探究的な話し合いに必要な指導スキルが分かってきた。
- ・特に、シンキングツールを活用した話し合い活動は、その指導技術をマスターした。そうした具体的な「術(すべ)」を、今までなぜ自分が身に付けようとしなかったのかを反省した。
- ・児童が今何を考えているか、学習前後で児童の考えが変わったことなど、振り返りの活動から児童の変容がつかめるようになった。
- ・話し合い活動の姿を見て、その後の振り返りの活動場面で子どもたちからどのような意見が出てくるかがだんだん分かってきた。思考を働かせているかどうかも分かってきた。

など。

【実践して分かったこと(主に成果)】

①必然性のある学習課題

- ・子どもが本当に課題を解決したいと思うような課題設定(思考コードを参考に)が、テーマに迫る学習には絶対条件であること。

②話し合い活動における支援の必要性

- ・話し合いの場面で児童の思考を巡らすためには、そのための具体的な支援やその手段、環境などをセットに考える必要があること。
- ・タブレット端末の活用はその支援の一手段であるという認識をもつこと。
- ・思考スキルを意識して働かせる体験とその積み重ねが効果的であること。

③考えていることの「見える化」

- ・その場その場の学習場面で、子どもの考えていることを名前マグネットなど活用して「見える化」することで、「自分の考えをさらによくするために思考しようとする」意欲と態度につながる。

④「省察」と思考のかかわり

- ・思考が深まっていたかどうかを見取るには、学習の振り返りの中に「AとBを比べてみたら分かった」「AとBは関係していた」「友達の意見から自分の考えが変わった」といった視点でま

とめられているかどうかを読み取ること。

⑤児童が望む授業

- ・本校児童の実態の一つとして、自分たちで考え、実行するための主体的な話し合いや体験活動が好きだということである。そうした児童が望む授業づくりへの意欲と指導力が必要であること。(教師の都合に合わせない)

⑥話し合いと時間の確保

- ・話し合いに対する時間が十分確保できない原因の一つに、個人の作業時間の確保がある。自分が考えたこと、疑問に思ったこと、やってみたいことなど自分の考えをまとめておくのは家庭学習にするなど、学校と家庭との間をシームレスにすることが有効であること。

⑦指導のための見取り

- ・思考力に関する学習状況を教師が把握し、児童の支援につなげること。
- ・振り返りの場面を中心に、思考力について見取り、誰でも評価できるようになったこと。

⑧統一した学級集団づくり

- ・学級づくりにつながる学習スキルに関する、教師の指導のばらつきが減ったこと。
- ・ケア的思考力のある児童を意識して指導できるようになってきた。また、ケア的思考力が育ってきた児童も増えてきたこと。

【主な課題として】

◇必然性のある学習課題をどう設定するか、教材(題材)を用意し、どう提示していくかを考える。

◇話し合い活動において教師が具体的に何を支援するのか、その支援の内容と方法を考え準備しておく(単に「声をかける」「促す」「助言する」という抽象的なイメージからの脱却)。また、児童が適切なシンキングツールを選択できるように支援を行う。

◇話し合いなどの活動で児童の思考が深まっていたかを、教師がどの場面でどう見取るのか。また、その機会をどうつくるのか(今回、振り返りを書かせた内容から、教師がどう読み取るかを提案)。

- ◇問題解決活動の過程において、一人1台のタブレット端末を活用した課題設定や対話、発表等の工夫について、実践を通してその効果を確認する。
- ◇授業に向かう基本的な学習態度や集中力、思ったことを発言したり聞こうとしたりする学級づくりを全学年で系統的に行うためのチェック機能を図る（段階表にまとめるなど）。